

大切なのは自分の心に 忠実に生きること

作家 **鳥越 碧**さん
(学芸学部英文学科'67年卒)



会社秘書から、フリーのライターへと華麗なる転身をとげ、一九九〇年には、「雁金屋草紙」で第一回時代小説大賞を受賞されたという鳥越碧さん。そんなエネルギッシュな鳥越さんに、学生時代のこと、時代小説への思いなどのあれこれをつかいました。

取材やパーティに 大忙しの学生時代。

小説家という、もと文学少女というイメージがあるのですが、
もともと小説は好きではなかったんですが、書くことには興味がありましたね。学生の頃は、隣の同志社大学の



と二人でダンスパーティを主催して七百人集めたこともありますよ。当時は大学生のダンスパーティが流行してたんですけど、女子大生の個人的な主催というのはなかったんです。同女生ひたりによる企画が新鮮だったのか、すごく売れた。そのお金で私は母にシヨールを買いました。親孝行したのは後にも先にもそれっきりですが(笑)。パーティ当日は瀧山季乃先生の試験の日。それなのに前日は勉強もしないで、トイレはあっち、クロークはこっちだなんて貼り紙作って準備に大忙し。ほんと、勉強はしませんでした。

寮に入っておられたそうですね。
ええ、とても楽しかったですよ。太子道あたりの郊外寮で、台所付きの個室、庭にはシュロの木。素敵な寮でしたけど、私は規則破りばかりしてました。みんな仲がよくて、その友だちとはいまでもつき合っています。

印象に残る先生は？
私、高山修先生の大ファンで、仲間の間でも有名だったの。友だちの前で、先生のご飯の食べ方までマネしたりして。卒論も絶対に先生の指導が受けたかったのね。先生の修士論文が「ガリバー」と知って、絵本でしか知らなかったスウィフトをとったんです。でも、フワフワ、ドキドキで、うまくいなくてひどかったけど(笑)。

英字新聞同好会(現クラブ)に所属し、OBの裏千家家元・千宗室さんや黒岩重吾さんなどの取材に飛び回っていました。いろんな人に会えるのが楽しくて。その経験が今の仕事につながっているのかもしれない。

勉強より、いかにサボるかを考えてました。例えば、月曜日は越智文雄学長(当時)のミルトンの講義ひとつしかないから、ずっとバイトに行っちゃってたら、学長室へ呼び出し。学長直々に「どうしてあなたは毎週月曜に病気になるのですか。もう一度みんなと同じ問題で試験をしてあげるから、勉強してらっしゃい」っていつてくださったのに、私ひねくれてたのね、同じ問題が出るはずがないって全然勉強していかなくて、結局落としたの。

じっくり取り組める 長編時代小説が好き。

カネボウなどの社長秘書からライターへ転身された動機は？
たまたま友人のBFが広告代理店に勤務していた縁で、とあるポータルレースのコピーを書いたのがきっかけです。その時の感想？ すごくラク！ギャラがよくて、もうこれで食べていけるって思いましたね。あの頃は、コピーライターって簡単に儲かる仕事だと信じ込んでいました。実際は、厳しい世界でしたけど。それに比べて小説は原稿料がすごく安いですが(笑)。

受賞作品では、なぜ尾形光琳をテーマに選ばれたのですか？
今考えてみれば、もともと絵が好きで小学生時代には油絵を描いていました。その頃から特に尾形光琳に心ひかれていたんです。社会人になってからは本格的に資料集めました。だから、朝日新聞で小説募集の記事を見た時、「光琳なら書ける」と思ったの。



ヴァインレポーター
藤井千春 深田和代
(学芸学部英語英文学科3年)
生き生きとした表情で、気さくに話してくれた鳥越さん。私たちの父と同年代のはずなのに、ほんの少しだけ年上の先輩と話しているような感じが不思議でした。



▲学生時代、黒岩重吾さんと



◀学生時代、千宗室さんと

の方のOK取りが大変です。「雁金屋草紙」では光琳のお母さんの名前がどうしてもわからなくて、わからないまま発表したら、尾形光琳研究の第一人者の山根先生が教えてくださったんです。やさしい方で「フィクションだから」って許してください。失敗をわがってはいけません。

現在、執筆中の作品について教えてください。
「美しいキモノ」「小説現代」といった雑誌に短編を書いています。本当は長編にじっくり取り組む方が好きなんです。いまは藤原道長の二人妻(ふたりつま)の一人、明子を主人公にした作品に取り組んでいます。当分は時代小説を書いていくつもりです。

最後に、私たち後輩にアドバイスをお願いいたします。
行き当たりばったりでもいいから、いっぱい恋をしましょう(笑)。若い時はメリットもデメリットも考えないで、損得だけで行動をとるようじゃ、人間あまりにも寂しい。エリオットに「判断の基準」という言葉があります。高山先生に教わったんですけど、判断の基準をどこに置くのかを考えること。自分に忠実に、自分の心の奥に判断の基準をもつことが大切だと思います。

私自身のモットーは「楽」。私の好きな尾形光琳の言葉で「楽にいたしたく候」というのがあります。光琳という人はお抱え絵師まで出世しておきながら、楽になりたいからってそれを断ってフリーになっちゃった。そんな精神的な「楽」を大切にしたいと思っています。

これから、素晴らしい作品を楽しみにしています。きょうは素敵なお話をありがとうございました。

Present
鳥越碧さんより著書四冊
詳細はa22の〈O.W. Station〉にて。